



図書館だより

2013.11
No. 20

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191 (代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

大学図書館の在り方

生 越 利 昭

(兵庫県立大学名誉教授)

私が、神戸商科大学（現兵庫県立大学）の附属図書館長をしていたとき（2003年頃）、図書館を今後どのような方向に進めて行ったらよいか、多くの人から意見を伺ったことがある。その中で、最も先端的な提案として、図書館機能の情報化の徹底、ハード図書に代わるデジタル図書化と不要蔵書廃棄による図書館スペースの確保、経費節約のため専門書以外の図書購入見直し、というものがあつた。この方向は、図書を含めた知の形態が広く情報の一部に包含される情報社会において、大学予算が困窮する中では、避けられないものであろう。

しかしながら、私自身は、経済学の古典研究を専門とするアナログ型人間であることもあり、この方向をそのまま受け入れることができなかつた。図書館は、過去から現在に至る多様な図書を収蔵する知の宝庫であり、そうした書物こそ図書館の命で、それを読むことは、単なる情報収集を越えて、それを書いた著者の苦労や熱い思いまでも追体験する、著者との対話と言ってもよい。知とは、総合的な人間力を支える教養と知恵なのである。一杯のコーヒーを飲むのはどこでも簡単ができるが、それを敢えてカフェで飲むのは、その空間に特別の意味があるからであろう。図書館も、単一の情報ではなく、そこにある様々な蔵書によって豊かな知の広がりを実現にし、閲覧室は読書と思索の時間を提供する特別な空間なのである。図書館は、この面を



「ヒックス文庫」の一部

忘れてはならず、そのための環境を整えておかねばならない。これが、私の図書館に対する思いであつた。

このような考えに立つてみると、大学図書館の今後の方向は、二つの側面を両立させることにあるように思う。第一に、情報の多元化に 대응するために、多彩な学術情報を広く素早く提供する機能のいっそうの充実である。これは特に、最新の学術情報を伝える様々な専門書や雑誌、さらに電子ジャーナルを充実させ、自宅からもそれらを簡単に利用できるサービスがあれば理想である。ただし、そのためには単独の大学図書館では限界があるので、他大学をはじめ様々な図書館との相互協力・連携が不可欠となる。第二に、図書館の環境整備である。きめ細かな閲覧サービス、静かで快適に読書できる閲覧室、情報交換して知を深めることのできる小討論室、情報収集のためのPC検索室、疲れを取る息抜きの場としての談話室やカフェも欲しい。

しかし、これらすべての実現は、特に予算面から、不可能であろう。だから、せめて一つでも、自らの大学の特徴に合わせた独自性を前面に出して、個性ある大学図書館を作り上げることが大切になる。

私は、予算制約のため、経済経営の専門書を重点的に充実し、電子ジャーナルの購読に予算を配分した。同じ神戸学園都市地域内の諸大学との相互利用を強化し、全国の大学との連携にも力を注いだ。従来からあった小討論室を整備し、資料室の一部をPC検索室に転用し、学生のニーズに応えようとした。また、貴重資料の「イギリス思想古典文庫」と「ヒックス文庫」を、できるだけ内外の研究者に利用してもらうためのサービス強化に乗り出した。これは、貴重な経済学の古典と、

ノーベル経済学賞受賞者ジョン・ヒックスの蔵書と書簡・手稿をまとめた稀観書であり、図書館の目玉になると考えたからである。

その後、神戸商科大学は、他の二つの大学と統合され兵庫県立大学になり（2004年）、図書館も「学術情報館」と名称変更された。その後の展開は、ますます厳しくなる予算と大学スタッフの意識変化を背景に、大きな変貌を遂げつつある。しかし、私が目指した基本的方向は、まだ見失われていないようである。



思い出の一冊 —『清貧の思想』と「矜持」—

吉 本 論

(地域政策学科・講師)

この「図書館だより」の原稿は、今年（2013年）4月から本学で教員として勤務をはじめた私にとって、本学の発行物に書く最初の原稿となる。内容は図書のことなら自由とのことだが、いざ書くとなると、何を書いたら…。「学ぶは、真似ることから」との言葉を思い出し、過去の「図書館だより」を読んだ上で、「皆さんこういう風にいるんだ」との感覚を覚え、パソコンの前に向かって。背伸びをすることが好きではないため、等身大で少々過去の足跡も交えて、一冊の本の思い出について書いてみることにした。

今、研究室の書棚にあった一冊の文庫本が机の上に置かれている。本のタイトルは、中野孝次著『清貧の思想』文藝春秋1996年。この本との出会いは、今から16年ほど前に遡る。本の表表紙をめくると、「1997年3月28日ある先生より研究室にて、別れのあいさつの際、矜持不可忘」、裏表紙をめくると、「花はだれのために咲く、自分自身のために咲く、人とのつきあいは一生、人の能力は平等、一生懸

命とはさわやかなり」と自分が書いた文字がそこにある。

これだけでは、他の人には何のことかわからないと思う。その経緯について少々話したいと思う。当時、私は、農業経済学を学ぶ大学院生であったが、就職のため鳥取から北海道・札幌に行くこととなった。鳥取を離れる前日、それまでお世話になったある先生に御礼を述べるため研究室を伺った。その先生は、私が大学院の半ば頃に、農林水産省の農業試験場長を経て、教授として鳥取に来られたが、「研究好き・好奇心旺盛・経験豊か」であった。先生と私は、研究室は異なっていたが、研究室の分け隔てなく接してもらった。

話好きな先生であり、よく大学院生部屋に来られては、お茶などを飲みながら、研究者や論文、数学、経済学の古典、新書本、仕事での経験、趣味の話など幅広い話を聞かせてもらった。先生の話に触発され、次第に大学院生の中に研究に対する興味が芽生え、皆が研究に真摯に取り組むようになっていった。

鳥取での最後の年は、同じ講座（6研究室で1講座）の大学院生ほぼ全員で、京都に学会報告に行ったという思い出がある（当時の学会報告要旨集を見ると、大学院生6名で学会報告に行っており、それぞれ報告している）。当時一緒に勉強した後輩の何名かは、

現在、茨城県つくば市にある国の研究機関で研究を続けている。

『清貧の思想』の本と、表表紙・裏表紙に書かれている言葉は、最後にその先生の研究室に挨拶に伺った際にいただいたものである。先生が私に伝えたかったことは、これから社会に出て就職するにあたり、いろいろな事があると思うが、矜持（自分のやってきた事を信じていただく誇り：広辞苑では「やってきた事」の部分が「能力」となっているが、その時の先生の話の意を酌み取ってそう記した）を大事にして、どのような所でも、どのような時でも、頑張りなさいということだったと思う。矜持は、プライドとは異なるとも付け加えていただいた。

寡聞にして当時のベストセラーとは知らず、後日、いただいた『清貧の思想』を読んだが、本阿弥家の人々の生き方などを通して、先生が私に伝えたかったことを改めて深く感じたものだった。本に挟んでいた2004年9月12

日の読売新聞（追悼抄）によると、著者の中野孝次さんは、2004年7月16日に79歳で逝去されているが、「真に自分が、自分自身になりきろう」と文学一筋に努力された方らしい。

この「図書館だより」の原稿を書くにあたり、『清貧の思想』をはじめ、当時の資料を見ることとなったが、「これからも矜持を大事にしていきたい」、その当時を思い出し改めてそう思った次第である。



そろばんの本

大塚 芳宏

(経済学科・講師)

新任の慣例であるこのページの寄稿に際し、自分が過去、図書館とは縁が無かったことを思い出しました。大学院在籍時、日中は働いていたので、終業後に大学へ向かい、所属ゼミに参加していました。その為、ゼミが終了する頃には大概、図書館の営業時間は終わっていたので、私にとって図書館は未知の館でした。ここでは、今年度の大学案内の自己紹介に座右の銘として「読み、書き、そろばん」と記載したこと、よく質問を受けることが共通していたので、「そろばん」に関することを書いていきたいと思えます。

この「そろばん」ですが、昔は足し算など

の計算能力のことを指していましたが、パソコンの高性能化、ソフトウェアの拡充と取り扱うデータ容量の拡大を背景に、最近ではパソコンによる計算処理能力のことを指すようになってきた気がします。

計算に関するアプリケーションソフトは、Excel、Eviews、STATA、Matlabを始めとした有料ソフトから、R、Octave、Oxなどの無料ソフト（ただし、Oxはアカデミックフリー）など数多くあります。これらのソフトを使って、計算を行う際に、(1) パッケージを使う (2) 自分で計算構造を構築するの2通りがあります。後者の場合、仕様説明書の解読やバグ修正など様々な闘いがあるので、始めは参考書の事例に沿ってパッケージを使い、慣れて行くことをお勧めします。

ここでは、本学がライセンス契約しているEviewsを紹介します。Eviewsは計量経済分

析の時系列解析や予測に重点をおき、エクセルに近い操作性から手軽に利用できるソフトです。Eviewsの参考書として飯塚信夫・加藤久和（2006）『Eviewsによる経済予測とシミュレーション入門』（日本評論社）をお勧めします。同書は、エコノミストなど実務家向けに書かれていますので、計量分析や経済予測に興味がある学生の皆さんにも大変有用かと思えます。また、同書は既存の統計学や計量経済学の書籍とは異なり、使う側の視点から書かれているので、利用しやすいかと思えます。

しかし、Eviewsは学内端末でしか利用できないので、自宅でもそうした計量分析を行いたい方には、Rを使われることをお勧めします。Rは操作画面がターミナルでのコマンド指令方式なので、Eviewsに比べて初めて使う方には抵抗があるかもしれません。しかし、Rはライブラリーのパッケージや参考書などが豊富にあります。無料ソフトを勧める理由としては、就職したときに職場が大学と同じ作業環境とは限りませんので、無料ソフトを扱えるというのは利点かと思えます。関連書籍については、朝倉書店から『統計科学のプラクティス』シリーズが出版されています。健康科学、環境データ、アクチュアリー、空間データ、マーケティングなど幅広く参考書がありますので、自分の研究テーマに近い書籍を読み、動かしていくのがよいと思えます。このRですが、以前は反復計算の速度が遅いという欠点がありましたが、64bit版以降、大きく改善されたようです。その為、繰り返し計算を必要とするベイズ統計学のマルコフ連鎖モンテカルロ法にも用いられてくるようになりました。事例やコードが掲載された参考書として、J.アルバート（2008）『Rで学ぶベイズ統計学入門』（丸善出版）が挙げられます。同書は、データの読み込み、グラフの描き方など基本事項から始まり、先述のマルコフ連鎖モンテカルロ法の

実装まで幅広く掲載されています。ベイズだけではなく、Rの操作を全般的に知りたい人にも有用です。

最後に、クラウド化や無線通信網の発達により情報が容易かつ多種多様に入手できる時代となりました。こうした情報に受動的に生きるのではあれば、現代の「そろばん」は不要かもしれません。しかし、実際に自分の手で分析し、結果を考察するというのも楽しいものです。また、講義やゼミで学習した理論や学説が現実社会とどれだけ一致または乖離しているのかを確認することができ、学習内容への理解や関心が一層深まるかと思えます。そして、最近では「ビッグデータ」や「データサイエンティスト」という言葉に代表されるように、情報を解析する「そろばん」の技術を身につける事も重要になってきているように見受けられます。散々偉そうなことを書き連ねましたが、学生時代は共同研究者から「スペースが1つ足りない」、「変数定義が下手」、「関数構造が美しくない」などよく叱責されました。しかし、そうして「そろばん」の技術を鍛えてもらったからこそ、今があるのだとその方に感謝の意をここに記し、今回の締めとしたいと思います。本の話というより、情報処理の話になってしまいましたが、卒論作成の参考になれば幸いです。



本と私

岩 重 聡 美

(流通・経営学科・教授)

1日を終え、ようやく自分を取り戻す時間がやってくる

雑然と置かれた本

仕事から専門書は机の上に高く積まれてはいるが

それらを1日の終わりに読むことはない

地方紙、経済紙、Herald Tribune　まずはこれらに目を通す

その先はその日の気分

仕事で行き詰っているときには中村天風や松下幸之助

心が華やいているときは、川端康成、森 鷗外

自分を鼓舞したいときには北村透谷

そして、喝を入れるときは安岡正篤

もちろんその時々話題になったベスト・セラーを手にも取ることもないわけではない

本に囲まれ過ごしてきたためか、少しの時間にでも手にする本がないのは

無性に寂しく、不安を掻き立てられる

1日を終え新たな日を迎える時は、自分を調整する貴重な時間

何も考えずその時々心に任せ本をつかむ

字面を追うごとに、心が落ち着きました次なる時間へと準備が整う

次の時間　翌朝のこともあれば、も少し先の時間　さらには数年先

そして自分の終生の時もある

いつの時も本から多くのことを学びそして心を整えてきた

さまざまな学問上の知識、経済や社会の情勢、歴史や多種多様な文化、生きる知恵

一方通行ではあるが、それでも本からは多くのことを得ることができる

自分と本との間ではいつも問いかけや批判が繰り返され、

その繰り返しのなか、本との距離の取り方そして自分なりの知識の処理の仕方を体得した

いついかなる時も心を正しくもち、いかに潔く生きるか

生きる意味　人としてのあり方

学舎では多くの知識や知恵を授かり、友人との出会いがあった

本からは、知識と共に未知の世界を垣間見ることができる

本を手にすることに　負担がないわけではない

多少の息苦しさ、負荷を課してでも本から得られることに限りがないことだけは

間違いない

この積み重ねが自分の心を鍛え整えてきたのではないかと　今になって思う。

長寿村訪問記

西島博樹

(流通・経営学科教授、東アジア研究所長)

数年前、中国の広西チワン族自治区を訪れる機会を得た。地図を見れば分かるが、この自治区は、西の雲南省と東の広東省に挟まれて、中国大陸の最南部に位置しており、ベトナムと国境を接している。首府は南寧市であるが、よく知られている都市は水墨画の世界を体感できる桂林市であろう。桂林市を流れる漓江を船で下れば、両側に奇峰が林立し、古来より多くの文人墨客を魅了した幻想的な風景が広がる。

しかし残念ながら、今回の旅の目的は漓江下りではなかった。中国政府の社会科学系シンクタンクである中国社会科学院の人口研究所による学術調査に同行した旅であった。広西チワン族自治区には、巴馬（パーマ）村という世界的な長寿村が存在する。世界地図にも載らないほどの小さな村である（実際に私が今広げている平凡社の世界地図帳では巴馬村を見つけることはできなかった）。

巴馬村までは首府の南寧市からバスで5時間を超える道のりであり、率直な感想を言えば、「とにかく遠かった」。だが、単調な高速道路から一般道へ降りてからは、見知らぬ村を通り抜け、名もなき川を渡り、幾つもの峠を越える、すると突然、桃源郷を思わせるような集落に出くわす、という行程の繰り返りで、バスからの眺めはけっして飽きることはなかった。

巴馬村では、80歳代の長男家族と同居されている102歳のおばあさんの家を訪問させていただいた。ここではこうした超高齢者による家族構成はけっして珍しくないそうである。息子（といっても80歳を超えているのである）が高齢の母親の身の回りの世話をしているというイメージとはほど遠く、お二人

とも現役としてごく普通の家庭生活（親子関係）を営まれている。102歳のおばあさんは驚くほどお元気で、今でも針に糸を通すことができる、われわれ訪問客に笑顔を交えながらそれを実演してくれた。

お昼になって、巴馬村の郷土料理（いわゆる長寿料理）をご馳走になった。長寿料理を口にしてまず感じたのは、「これはいける！」。塩分を控えた味気ない料理を想像していたが、実物はごく普通の中国料理であった。香辛料はやや控えめかもしれないが、地元で採れたばかりの新鮮な野菜と肉（豚肉だったと思う）が贅沢に使われており、素材の味が際立っている。要するに、長寿料理のキーポイントは「地産地消」であった。M社のハンバーガーやK社のフライドチキンを代表する食材に侵蝕された我々は長生きするはずがないと確信した。これは私見であるが、現代人の平均寿命は統計上のマジックであって、実際は昔の人の方が健康で長生きだったのではないだろうか。いろんな意味で巴馬村訪問は貴重な経験であった。

余談になるが、昨年3月に本学大学院（経済学研究科）を修了した私のゼミ生が、現在、南寧市政府の公務員として活躍している。いつの日か彼女に案内してもらって、巴馬村をもう一度訪れたい。



(写真) 桃源郷のような巴馬村：筆者撮影

谷澤毅『北欧商業史の研究
世界経済の形成とハンザ商業』
知泉書館、2011年

長濱 幸一

(経済学科・講師)

西洋経済史に関心がある方ならば、「ハンザ」という言葉を一度は耳にしたことがあるだろう。教科書流に言えば、「中世後期に、バルト海・北海交易を独占する目的で結成された、北部ドイツ諸都市の同盟」ということになるだろうか。しかし、成立・滅亡した年もはつきりせず、国民国家の枠組みとは全く異なる「都市同盟ハンザ」と「北欧商業」の世界は、現代の日本人にとっては、不思議な存在と言えるだろう。

そのハンザと北欧商業の実態を具体的に示してくれるのが、本学経済学部流通経営学科・谷澤毅教授の長年の研究成果がまとめられた本書である。その中身に立ち入る前に、本書の構成に簡単に触れておこう。本書は序章、結びに加えて9つの章と3つの補論から構成されている。14世紀から17世紀までの長期的時間軸の中でハンザの盟主リューベックを中心とするハンザの商業活動が論じられている。紙幅の都合と筆者の能力から、本書の全てを十分に紹介することはできない。ここでは本書の論点を二点のみ紹介したい。

第一には、ハンザの東西交易の結節点としての機能である。ハンザ諸都市が毛織物などの西欧産品と毛皮などのロシア産品の交易を担っていたことは、よく知られている。本書では具体的な取引品目を示しつつ、その交易が13世紀から16世紀初頭まで、長期的に安定して継続していたことが明らかにされている。特に教会で利用される蜜蝋の取引が、継続的、かつ大量に行われていた事実は、ヨーロッパ世界の聖俗の深い結びつきを想起させ、興味深い。さらに、ハンザと言えば海上貿易に目が奪われがちだが、リューベック・ハン

ブルク間の内陸路通商の果たした役割が解明され、立体的なハンザの商業活動が描き出されている。



第二には、ハンザの衰退がオランダの台頭・近世ヨーロッパ経済の形成と関連付けて論じられている点である。通常、ハンザの衰退は、オランダのバルト海進出が原因とされる。これを本書は、オランダを中核とする「近代世界システム」形成の文脈で検討している。ハンザ商業の基本軸を形成するリューベックとハンブルクの二つの都市を比較しつつ、オランダ・大西洋貿易との結びつきを深めたハンブルクの発展と、バルト海貿易に活動の場が限定されていくリューベックの発展の経路の違いが明らかにされている。オランダの台頭がもたらした、大陸ヨーロッパへの経済的影響が具体的に示されている。なお留意すべきは、リューベックが、バルト海内のローカル需要を満たすべく、地域内の交易拠点という地位を維持した点だ。世界商品を取り扱うような交易の舞台からは退いたことで、むしろ、人々の生活の基盤となる地域経済圏としての性格が明瞭になったように思われる。ハンザの衰退と北欧商業の変質には、「近代世界システム」が形成される中でヨーロッパが経験した変化が強く投影されているのである。

冒頭に、日本人にとってハンザは、なかなか理解しがたい存在だと述べた。それは、私たちの思考が、国民国家の枠組みに強く囚われているからに他ならない。しかし、ヨーロッパに目を向ければ、金融危機に伴う国民意識の再燃などの課題に直面しつつも、一種のヨーロッパ地域が形成されようとしている。ネイションを研究対象としている筆者にとっては、本書は、そのような国家を単位としない歴史的視座の必要性を問題提起してくれているように思われる。

M.サンデル

『これからの「正義」の話をしよう』

古河 幹夫

(経済学科・教授)

サンデル教授の「ハーバード白熱教室」がNHKで放映されたとき、私も一度見てすっかり魅せられてしまった。世界トップクラスのハーバード大学でどのような講義がなされているのか、しかも哲学教室というからには…、という世間一般の耳目を引く宣伝でさぞ多くの人がテレビ聴講したことだろう。アリストテレス、カント、ベンサム、ロールズといった道徳哲学、政治哲学の重要人物を登場させ、内容的には立派な大学の教科書レベルである。

新入生セミナー後期のテキストに福沢諭吉の『学問のすすめ』を提案したところ、学生から標題の本を提案する声があがった。願ったりである。一つの章ごとに2人で内容紹介をしてもらう。次に、4～5名のグループに分けて議論し、共通に設定したジレンマ状況での判断についてグループごとに結論を出し、代表者が発表することにする。ジレンマ状況とは、たとえばあなたが路面電車の運転手だとの設定で、5人の作業員が線路上で作業中であるとする。だがブレーキがきかない！待機線に舵を切る選択肢はある。だがそこにも作業員が1人いる！どうすべきか。待機線へと舵を切って5人の命を救うべきか？そのためには何の罪もない1人の命を犠牲にすることになるが、5人を殺すよりはましだ。でも、

そんな判断を下さなければならないなんて…。

このような究極の選択を迫る論点ばかりではないが、意見が分かれるような論点がいくつも集めてある。たんなる「知能ゲーム」ではなく、現実の社会との関連性はきわめて高い。高校の「公民」や「倫理」の授業の延長と言えるかもしれないが、「正しい行い」といった問題設定を迫られ、かつその根拠を説明するといったことは日常生活では稀ではないだろうか。また、経済学においては功利主義という哲学が明示的でなくとも、ほぼ当然視されている状況で、「正義」を考えるという経験はそれなりに新鮮だったようである。

私が専門とする経済政策論において「公正」「正義」は重要な論点であり、私個人にとってロールズ正義論は研究テーマでもある。グループごとの話し合いをふまえて発表のとき、私がどのようなコメントをするのか、学生たちは強い関心をもって構えている。眼がそう語っているのがよくわかる。ここが教師の腕の見せ所である。マイケル・サンデル教授の足元にも及ばないとはいえ、サンデルになった気分在白熱のコメントをする。

「正義」という問いは世間的には青臭い議論、若者にとっても縁の薄い生真面目なテーマだろうが、奴隷制の廃止や非人道的武器の使用禁止といった、人類が何百年もの年月をかけて実現しようと努力してきた大いなる理想の一つである。そのようなテーマを正面から論じた書物に関心をもち、自分たちも議論してみたいと提案してくれた学生たち。将来展望が見えにくい現下の世界とくに日本において、語るに足る若者に出会った心地で、意気盛んなセミナーであった。

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）